# 我牢獄　　北村透谷

## 作者

### 北村透谷

本名は門太郎。相模国小田原に生まれる。祖父は藩医であったが佐幕派ゆえに没落、父は東京に出て官立の昌平学校で学び役所に職を得た。透谷が十二歳の時に一家は数寄屋橋近くに移り、後の雅号「透谷」（すきやばしとうこく）へとつながる。泰明小学校では校長に認められ、明治十五（一八八二）年、卒業式で「空気及び水の組成」と題して演説した。

卒業前から自由民権運動に感化され政治家を目指した。旅を好み、神奈川県議会の臨時書記や横浜グランドホテルのボーイをしたり、東京専門学校（後の早稲田大学）に入って読書に励んだ。そして大矢蒼海をはじめとする三多摩地方の民権運動家たちと交わって、優勝劣敗思想との対決色を強めた。しかし明治十八（一八八五）年、運動資金調達のための強盗への参加を大矢に求められて離脱、言論によって理想を訴える道を模索する。

明治二十（一八八七）年夏、三多摩の民権派名士・石坂昌孝の娘・美那との激しい恋愛体験とキリスト教入信により、思想生活に一大転機を迎える。翌年の結婚後には、自由律叙事詩『楚囚之詩』(明治二十二)を自費出版するも破棄、明治二十四（一八九一）年、現世を支配する大魔王からの誘惑を拒絶する劇詩『蓬莱曲』を刊行して、粗削りながら真率な内面的苦悩を表現し、日本近代詩史に大きな足跡を残した。

透谷は西洋人によるキリスト教の伝道や出版活動の通訳・翻訳・編集に多く携わっていたが、明治二十五（一八九二）年二月、巌本善治の「女学雑誌」に評論「厭世詩家と女性」が掲載されたことで、新たな価値観を有した文学者として広く印象付けられた。明治二十六（一八九三）年一月、同誌派生の「文学界」の創刊に関与して、島崎藤村たちと近代日本におけるロマン主義の思潮をリードし、硯友社グループや幸田露伴による江戸文学回帰や、民友社グループによる事業的な文学観に対峙し続けた。この時期は硬質な漢文訓読調の文語体で鋭い評論を書くことが主であるが、少ないながら小説や叙情的な詩も残している。しかし二年足らずの充実した評論活動の最中、様々な事情が重なり、明治二十七（一八九四）年に自宅で縊死した。

## 出典

本文は『明治の文学』第16巻(筑摩書房　平成十四)によった。教科書表記の統一による変更のほかは、本文に異同はない。

## 語句の研究

### ●一七八ページ

**キー・ポイント　上17我が悲恋**　「我牢獄」の「我」は、実際の牢獄に入っているわけではない。しかし「第一期」の「自由」な状態を過ぎた「第二期」の「我が悲恋」における魂の状態は、まさに「捕繋」されていることと同じであると嘆いている。

**上17凛々たる**　身に染みて寒い様。

**下1九腸**　腸全体、はらわた。

**下3籠中**　かごの中。

**キー・ポイント　下3我が半魂の行衛**　恋人同士の引き裂かれた魂が求め合うというイメージは、プラトン『饗宴　愛について』のプラトニック・ラブをめぐる議論において喜劇詩人アリストファネスが唱える説を想起させる。アリストファネスによれば、古来、人間は背中合わせで「男・男」「女・女」「男・女」のいずれかが一体化している完璧な存在だったが、神ゼウスの怒りに触れて真っ二つに引き裂かれ、その半身を求めて現世を彷徨っているとされる。失われた半身を憧憬し求めることがエロースであり、その実現のためには神に従うことを薦められる。

**下3血涙**　ひどい悲しみや憤りのために出る涙。『韓非子』「和氏」に由来する。

**下4雷音洞主**　幸田露伴の別号。「我牢獄」が対話的に扱おうとしている露伴の「風流悟」（『国民之友』明治二十四・八）の初出時の筆名は「雷音洞主」である。

**キー・ポイント　下4風流**　上品で優美な趣のあること。優雅なおもむき。みやびやかなこと。また、そのさま。詩歌を作り、その趣を解し、あるいは趣味の道に遊んで世俗から離れることにもいう。この時期の露伴は「風流」という言葉を多用している。ここでは特に「風流悟」（『国民之友』明治二十四・八）を念頭に置くか。

**キー・ポイント　下4恋愛**　明治初年頃より英語 love の訳語として、「愛恋」「恋慕」と共に用いられたが、明治二十年代には「恋愛」が優勢となった。

**下6捕繋**　捕まえて獄につないでおくこと。拘束、繋留すること。

**キー・ポイント　下10デンマルクの狂公子**　デンマークの王子ハムレットのこと。シェイクスピア（一五六四～一六一六）の代表作の一つである五幕悲劇「ハムレット」（一六〇一頃）の主人公。ハムレットが狂ったふりをする場面もあるが、ふりであるのか本当に狂っているのかを、周囲は判断することができない。明治二十四（一八九一）年六月、横浜でのミルン一座による「ハムレット」を観劇した際、後にシェイクスピア劇を全訳する坪内逍遥と出会い、自宅を訪問する機会を得ている。また、透谷をはじめとする「文学界」周辺の文学者たちはシェイクスピアへの興味を共有していた。

**キー・ポイント　下10我母が我を生まざりしならばと**　「ハムレット」三幕一場では、ハムレットがオフィーリアに向けて、有名な「尼寺に行け」の台詞を言い放った後、

「I am myself indifferent honest; but yet I could accuse me of such things that it were better my mother had not borne me:」と続ける。

**下11打ち喞たしむるのみ**　（「打ち」は接頭語）恨み嘆かせるばかり、何かのせいにして不平を口にさせるばかりである。

**下12黄鳥**　鶯の異名。特に高麗鶯を指す。漢詩に用いられる。

**下16愁涙**　つらい悲しみのために流す涙。

**下16蒼頬**　青白くなった、蒼白となった頬の

意か。

**キー・ポイント**　**下16 闌干**　縦横に散り乱れるさま。涙の盛んに流れ出るさま。唐代の詩人・白居易の「長恨歌」（八〇六）には、「玉蓉寂寞涙瀾干」（玉容寂寞として涙瀾干たり）とある。「長恨歌」は玄宗皇帝の楊貴妃に対する悲恋の想いを一二〇句にわたり壮大に描いた長歌であり、『源氏物語』をはじめ日本文学への影響が大きい。例えば『保元物語』には「涙瀾干として魂飛揚すと見えてあはれなりし」とある。涙と魂の組み合わせは、「我牢獄」にも響いているか。

## 鑑賞

「我」を語り手とした一人称の短編小説であるが、前半部分では「もし」を繰り返すことで、聞き手がいるかのような、その「我」の苦悩を誰か（読者を意識するか）に訴えかける仕掛けになっている。引用部分は、すでになぜ現在の状況が「我牢獄」と言い得るのかをしっかりと説明した後の結末部近くであり、徐々に終わりなき苦しい生よりも甘美な死へと自らを引き寄せていく勢いが、リズムのある漢文訓読調の文語体によって表現されている。「女学雑誌」に画期的な評論「厭世詩家と女性」を掲載されたのが明治二十五（一八九二）年二月であり、その四か月後、「我牢獄」は同誌六月号に掲載されている。小説という透谷にしては珍しいジャンル（生涯に三作のみ執筆）を採用し、すでに透谷の評論を知っていたかもしれない同誌読者に訴えかけたいものがあったはずである。ただし、本作には付記があり、「旧作を訂し」たものであること、「篇中の思想の頑癖に至りては或は今日の余の思想とは異なるところなり」とことわっている。付記での自称詞は「余」であり、「我牢獄」については過去の「思想」として相対化している点を考慮した上で、その求心的な内容と形式を読む必要があるだろう。

本作は十四の形式段落（①～⑭で表記）で構成されているが、①では自分は虫も殺せないほどに臆病だが「我は牢獄の中にあ」ること、②では獄吏さえいない天然の独房であることが説かれる。生まれながらに牢獄にいたわけではないが、確かに「自由」を謳歌できた「故郷」と呼ぶべき第一期があり、現在は牢獄に囚われた第二期だが、「故郷」を想起できるから希望が持てているとする（③）。たまに牢獄に見舞いに来る名誉・権勢・富貴・栄達は「我」に対する獄吏と言えるが（④）、牢獄で出会うこれらの世俗的価値を天使だと勘違いする人々もいる（⑤）。シェイクスピアがハムレットに仮託したように、「我」もまた天地の間を這う愚か者に過ぎないが、しかし現世的なことには満足できない（⑥）。⑦では露伴の「風流」論を意識しつつ、「我が心宮を観ずること」は難しいが、「風流」すなわち「趣味と称する魔力」も信頼できず、獄吏か天使であるかは判断できないと述べる。

⑧からが本作の核心である。「我」が牢獄にいると気付いた時には、牢獄には「我が霊魂の半塊」が残り、「故郷」に残りの半部が引き裂かれてある。普段は「故郷」を忘却しているが、ただ一つ、「悲恋を湊中すべき者」がいたことは記憶しており、時間が経つにつれて「我が悲恋」はいや増すのみだとする。⑨では、「我が牢獄」と「故郷」の構造が語られる。「我恋ふ人」に初めて出会った時、「我霊魂」の半部は失われて彼女の中に入り、同様に「彼女の霊魂」の半部も失われて「我」の中に入ってしまった。しかし、現在の牢獄の「我」の中にある二人の半部同士では「円成せる霊魂」を有することはできず、「故郷」にいる彼女のそれぞれの半部がお互いに必要なはずなのに、二つの世界を行き来することはできない。⑩では、夢で逢えたと思っても、すぐに恐ろしい悪夢へと変じるが、それでも現実より眠りの方が慰められると漏らす。

引用箇所は⑪と⑫に当たるが、漢文学の教養（白居易）と西洋の教養（シェイクスピアと恐らくはプラトン）を動員しながら、

露伴の「風流」論ではやり過ごすことができない「悲恋」の「無風流」な苦しみを、歯切れのよい文語体で構築していく。ここでは、「恋愛」に囚われたことと「牢獄」に囚われたことは恐らく同根なのだが、その必然的な矛盾が、「我を殺す」ように仕向けながら、「死す能わざる」意志も「我」に発現させているという「狂」に肉迫する。しかし、「黄鳥」の声によって一瞬生じる「恋人の姿」の幻では満たされることのない「悲恋」を活写し、さらに⑬で「我」は中国の伝説の仙女の力でも満たされないことを述べ、⑭では「死」に導かれ、遂には「我」は読者に「おさらばなり」と告げる。

小説のかたちを借りることで、「我」の極端に観念的な「悲恋」への衝動が収斂していく地点まで描き切った。引用箇所は、特に心的世界において理屈が袋小路を形成する過程を追っている。新たな価値観や観念に対する、いわば「我」というプリズムを通した試験運用の記録とでも呼びたいような鮮烈さが、西洋の言葉を巧みに取り込む漢文訓読調に共存する。ただ、露伴文学の理解が一面的である点には注意が必要であろう。『透谷と近代日本』（共編、翰林書房　平成六）所収の平岡敏夫「透谷と明治二十年代小説――ひとつの反省・「風流悟」と「我牢獄」」が参考になる。

（小澤　純）